

## ニューヨークの亡命知識人パウル・テイリツヒと京都の神学者有賀鐵太郎

——有賀鐵太郎所蔵のパウル・テイリツヒ著『社会主義的決断』（一九三三年）をめぐって

深井智朗

はじめに

ナチスが政権を奪取する過程において各地で行った焚書は、宣伝大臣ヨーゼフ・ゲッベルスがシナリオを書いた政治的ドラマ、あるいは擬似宗教的な儀式であった。<sup>1)</sup> その証拠にゲッベルスの「政治的ドラマトゥルギー」はシンボリックな意味を超えて、その後の出版・言論統制を支配する政治神学となった。<sup>2)</sup> ナチスの焚書事件として知られているのは一九三三年五月一〇日のフランクフルトをはじめ、全国一二都市で行われたものであるが、実は既に四月一日にヴッパータールとポツダムで、さらには五月二日にはライピチツヒで同様の焚書が予行練習として行われていた。一回の儀式で焚書にされた書籍は平均二万五千冊と言われている。しかしこの数字はナチス

側の発表であるから正確な数字であるかどうかは分らない。しかしこの数が意味していることは、焚書されるべきだと判断された書物は徹底的に探し出され、この儀式のために各都市の広場に集められたということであろう。

二〇一〇年三月三十一日のことであった。この時焚書にされた書物のリストに含まれていた一冊を京都大学のキリスト教学の教授であった有賀鐵太郎の個人蔵書の中に発見した。<sup>3)</sup> それはフランクフルト大学の哲学教授であったパウル・テイリツヒの『社会主義的決断』<sup>4)</sup>である。この書物は一九三三年に出版されたが、数日でナチスによって出荷停止となり、焚書リストに加えられ、それによって事実上の発禁処分になった書物と見なされ、いったん書店に送られた初版の多くが出版社に返品、あるいは出版社によって自主的に回収

させられ、人々によって焼かれ、出版社に残された在庫は断裁処分となっていたからである<sup>5)</sup>。その意味ではこの書物は二〇世紀の戦争と思想との関係を象徴的に語る貴重な一冊なのである。しかし発売直後に焚書リストに指定されたこの書物がどのような経路を経て日本の一研究者の手元に届けられ、その蔵書に加えられたのであろうか。

この書物を所蔵していた有賀鐵太郎は、戦後は京都大学文学部長をつとめた神学者であったが、この書物を入手した頃は同志社大学文学部神学科の教員であった。彼は一九七七年に亡くなっているが、二〇〇九年になって遺族が家屋の整理のために、講義ノートや書簡、日記などの文書資料は京都大学文書館に、雑誌を除く蔵書は東京にある在日大韓基督教会神学校の図書館に寄贈することになり、三〇年間自宅書庫で眠ったままになっていたこの書物が突然歴史の表舞台に登場することになったのである。

この書物がどのような運命を辿って日本に届けられたのかについては、これまで欧米の研究者を中心になされてきた膨大なテイリツヒ研究の成果を見ても、また最近はじめたばかりの日本の近代神学史研究の成果を見ても、何らの情報を見出すことはできない。それどころか戦前にはじまり、戦中、戦後と続いたテイリツヒと有賀との知的交流についての研究もこれまでまったく手がつけられないままであった。

しかし今回見つかった有賀の蔵書には、これまで断片的な情報が知られていただけの両者の知的交流を解明するために、またこの書物がどのようにして日本に届けられたのかを解明するために必要ないくつかの重要な情報が残されていた。

第一に、有賀が所蔵していた書物は、一九四八年に初版の奥付まで含めてファクシミリ版でリプリントされたものではなく、間違いなく一九三三年にポツダムのアルフレット・プロッテ出版から刊行されたテイリツヒの『社会主義的決断』の数少ない、貴重な初版本の一冊である。一九四八年にボルベルク出版社から出たリプリント版は初版とまったく同じ体裁で刊行されたが、当然リプリントであることを示す文言が、初版のクレジットの下に、初版の字体よりも少し大きな八ポイントの活字で追加印刷されている。しかし有賀の蔵書にはそのクレジットがないので、明らかに初版である。

一般にはテイリツヒのこの著作は、一九四八年版によって知られるようになったのであり、初版を読んだ人はほとんどいなかったはずである。テイリツヒの友人であり、また彼の伝記を書いたヴィルヘルム・パウクは本書の初版について次のように書いている。『社会主義的決断』は、書かれるのも、刊行されるのも、遅きに失した。ヒトラーが独裁権力を手にした時には、それは直ちに発禁となり、出版社は配本を禁じられた。その後の何年か、ごく小部数のものが、ひそかに回覧されたにとどまった。<sup>6)</sup>」

初版は一九三三年五月一〇日までにはフランクフルトをはじめ全国の主要な都市で書店や図書館から回収され、他の「思想的にふさわしくない」とされた書物と共に広場に集められ、焼却処分にあっていたのである。この種の焼却処分は繰り返し返され、そのたびにティリッヒの書物も薪とともに焼かれたのである。全国の書店は学生団体による嫌がらせを恐れ、書棚からこの書物を引き上げ、出版社に返品した。しかし有賀が所有していた『社会主義的決断』は焼却を免れた、数少ない初版なのである。

第二の情報は、「T. Ariga October 1933」という黒いインクによる書き込みが見開き頁の右上にあり、有賀がこの書物を一九三三年一〇月に購入していることがわかる。

ティリッヒはこの書物の原稿を一九三二年の年末までには完成させ、校正を終えて、フランクフルトで長い「まえがき」を書いていく。その日付は一九三二年一月九日となっている。その後印刷にまわされ本書が刊行されたのは、アルフレット・プロット社の資料によれば一九三三年三月二十七日である。ティリッヒは四月一三日にフランクフルト大学を停職になっており、それに合わせて『社会主義的決断』の出荷停止処置がとられている。その後ナチスによる焚書事件が起こったのが同年五月であるから、有賀は三月二十七日から四月一三日までの一八日間の間に何らかの方法でこの書物を入手したと考えるのが妥当であろう。また五月一〇日の焚書事件が有名で

あるが、既に述べた通り用心深いゲッベルスはヴァッパータールとポツダムで四月一日にいわば予行練習を行っており、ティリッヒの『社会主義的決断』の出版社がポツダムにあることを考えれば、この書物が市場に出たのは三月二十七日から四月一日までのわずか六日間という可能性もある。

そして第三の情報は不思議なことにこの書物にはティリッヒの直筆のサインが書き込まれており、その日付は一九六〇年六月一日なのである。そこには次のように書かれていた。「パウル・ティリッヒ。友情と感謝をこめて。(二七年の時を経て) 京都にて 一九六〇年六月一日 (Paul Tillich in friendship and gratefulness (after 27 years) Kyoto, June 1st 1960)」と著者であるティリッヒ自らが青いインクで書き込んで入る。一体これはなぜなのか。

有賀の蔵書に書き込まれたこれらの情報を通して、ナチスに追われたニューヨークの亡命知識人であるパウル・ティリッヒと戦時中唯一残された大学令に基づく神学部の教授であった有賀鐵太郎との知的交流の一端を解明できるかもしれない。本論はそのような目的をふまえた上での有賀の一冊の蔵書についての調査報告である。

#### 1. 一九三三年五月一〇日のフランクフルトの夜

一九三三年五月一〇日の夜の出来事であった。その儀式は一八時の教会の鐘の音を合図にはじまった。フランクフルト市の中心部、

かつて皇帝の戴冠式が行われた広場で二万五千冊を越える書物が集められ、燃やされたのである。ナチスによるいわゆる「焚書事件」として語り継がれている出来事である。もちろんそれはフランクフルトだけで起こったわけではなく、ドイツ国内の主要な都市でも同様の出来事が起こっていた。その時の様子をテイリツヒは次のように語っている。これは彼が亡命後ニューヨークのラジオ局から、ドイツ国民に向けて定期的に行っていた放送『アメリカの声』(Voice of America)で語ったことである。

「あなたがたの多くが、まだあの日の出来事を覚えているでしょう。私はそれを目撃することになったので、それがいかに私にとって重要で、不気味で、そして決して忘れることができないものであったかをお話ししてみたいと思います。それはフランクフルトでのことでした。私と妻はかつてドイツの皇帝たちの戴冠式がそこで行われたレーマー広場に面した建物の窓から目撃したのです。中世の面影を残すこの広場に群集が押し寄せ、黒シャツや茶シャツがそれを静止しようとしていました。そこに薪が山のように積み重ねられると、狭い路地から松明を持った者たちの行列が登場しましたが、それは制服を着た学生や党員たちでした。その列が延々と続くのです。松明の光は暗闇の中で、ゆらゆらと揺れ、建物の破風を照らし出しました。私はスペインの異端審問時代の絵を思い浮かべていました。すると最後に、まさに中世さながらの姿で二匹の牛に牽かれ

た荷車がガタガタと音を立てて広場に入ってきたのです。そこには犠牲のために選ばれた沢山の書物がのせられていたのです。荷車の後ろには大学教会付きの牧師が大腿で歩いてきました。一同が薪の山に火をつけると、牧師はその車に乗り、弾劾のための説教をはじめました。それから最初の本を自らの手で火のついた薪の中に投げ込み、さらに何百冊もの書物が同じ運命となりました。その焔は高く燃え上がり、夢の中のような光景を映し出したのですが、それは現実でした。時間は二百年も逆戻りしたのです。」<sup>(8)</sup>

この夜の約一ヶ月前、ナチスはドイツ学生協会(Deutsche Studentenschaft)を使って、「非ドイツ的な魂」に対する抗議運動を行う宣言を行い、新聞やラジオ放送を使って、この運動内容を宣伝しはじめた。それはドイツ的ではない思想家たちの書物を焚書にする「払い清め(Säuberung)」の儀式を行う宣言であった。

この運動ははじめから宗教的な様相を呈していた。まさに中世の異端審問を再現して見せることで運動としての効果を具体的なものとするねらいであった。さらにはこの出来事は、もともとドイツのだと彼らが考えた歴史的出来事のひとつであるマルティン・ルターの宗教改革を真似て構想された。彼らはルターの「九五カ条の提題」をパロディー化した「一二カ条の提題」を発表したのである。かつて一六世紀に、一七世紀のピューリタン革命より、一八世紀のフランス革命よりも早く「自由」と「解放」の革命を行ったドイツ人ル

ターの精神がここに甦る、というシナリオを彼らは書いたのだ。純粹なドイツ語とドイツ文化の重要性が高らかに宣言され、「非ドイツ的」なもの、「ユダヤ的知性における知識の偏重」、そして「マルクス主義の誤り」が指摘されており、それらを排除し、ドイツ的な文化の純化のために一致団結することが呼びかけられたのである。

この宣言に基づいて、学生たちが一九三三年に何万冊もの「非ドイツ的な」書物を燃やしたのである。その様子を伝えているのがあのティリッヒのラジオ放送である。それはまさに宗教的な儀式であった。ナチスの指導者のみならず、大学教授、牧師、学生の指導者が儀式を担当し、驚くべきことにルターの讚美歌「神はわがやぐら」が歌われ、最後には「火の誓い」と題されたナシヨナリズム高揚のための讚歌が歌われ、大学牧師の祝祷によってこの儀式は終わった。<sup>9)</sup>

その光景を目撃したティリッヒは亡命を決意した。彼はフランクフルト大学の同僚や社会研究所の友人たち、すなわちマックス・ホルクハイマー、ヴェンセント・アドルノ、エーリヒ・フロム、そしてヘルベルト・マルクーゼやハンナ・アーレントとも密かに連絡をとり合い、亡命先についての情報収集をはじめることになった。<sup>10)</sup>

フランクフルト大学は一九一四年に設立された新しい大学であったが、新しいだけではなく、他のドイツの大学と違って、一部が民間の資金によって賄われ、リベラルで、ユダヤ人知識人の多い、「赤

い大学」とさえ呼ばれていた。<sup>11)</sup> ティリッヒは神学者であったが、一九二九年にクルト・リーツラーの推薦で、マックス・シェーラーの突然の死によって彼が教える前に空席になってしまった哲学部の社会教育学講座の教授に就任した。<sup>12)</sup>

ティリッヒはそこでアドルノの教授資格論文を審査し、その後は彼を助手にし、ホルクハイマーが社会研究所の所長になるのを助け、フロムが社会研究所の正式な所員となることを大学と研究所との契約に基づき哲学部の学部長として了解する書類にサインをした。ひとはティリッヒのことを「ユダヤ人の中のパウロ」と呼んでいた。

また彼はこの時代、通称「カイロス・クライス」という社会主義的な運動で中心的な働きをし、ハンブルクのエドワルト・ハイマンやベルリンのアウグスト・ラートマンなどと『新社会主義雑誌』の編集にかかわっていた。<sup>13)</sup>

そのために彼は、ナチスが政権を奪取すると、民族的、政治的に疑わしい教授職のひとりとして、非ユダヤ人以外で最初に停職職分となった教授のひとりとなった。<sup>14)</sup> 彼は一九三三年の四月一三日にその通告を受けている。友人のホルクハイマーやフランクフルト社会研究所の所員たちの多くは身の危険を感じて、既に三月には出国なにし亡命していた。

ホルクハイマーによれば、一九三三年の二月、ティリッヒの社会

主義についての著作、あるいは彼の『現代の宗教的状况』という著作の中のいくつもの個所の故に、移住の機会があればそれを利用するか、命を落とす覚悟をするようにと、彼に忠告したという。それにもかかわらずテイリツヒは状況を甘く見ていたようだ。しかし状況は好転するどころか、急速にテイリツヒに不利な方向へと向かっていた。<sup>15</sup>既にナチスによって経営陣と編集部とを押しえられていた『フランクフルト新聞』は、四月に入ってフランクフルト大学を批判する社説を掲載するようになっていたが、<sup>16</sup>その中でテイリツヒは「憎むべき敵の権化」と呼ばれ、「信頼のおけぬ大学教授」のひとりとして名指しされ、出版されたばかりの彼の『社会主義的決断』の文章がその証拠として引用されたのである。<sup>17</sup>

そのような状況に追いつまされてテイリツヒはようやく重い腰をあげて、ニューヨークのコーンピア大学とユニオン神学校が差し伸べてくれた助けを受け入れたのである。

## 2. 一九三三年五月一五日のニューヨークの会議

実はあの擬似宗教的儀式が行われた翌週、ニューヨーク市のコーンピア大学に、ブロードウエーのアップタウンの諸大学の責任者たちが集まっていた。その会合の議事録は複数残されているが、ユニオン神学校の図書館（現在はコーンピア大学の図書館）に保存されていた議事録によれば、この会合は「国外追放ドイツ人学者援助緊

急委員会<sup>18</sup>」と名付けられていた。すなわちこの会合でナチスの最初の犠牲者となった創造的で有能な大学教授たちをアメリカへと迎える可能性についての協議が行われたのである。お互いに忌憚のない意見を述べあうことができる各大学の学長と学部長が集まり、予め準備されたリストに基づいて慎重な協議が続けられた。このような会合はアメリカの他のいたるところでも行われていた。

ニューヨーク市での会議の出席者のひとりに、コーンピア大学に隣接するユニオン神学校校長のヘンリー・スローン・コフィンがいた。彼はそのリストの中にフランクフルトの哲学教授であるが、元来神学者であるパウル・テイリツヒの名前を見つけた。コフィンは彼の同僚で、有名な社会倫理学者ラインホルド・ニーバーの弟でイエール大学神学部教授であったヘルムート・リチャード・ニーバーによって翻訳されたテイリツヒの『現代の宗教的状况』を訳者自身から贈られ、それを読んだ直後であった。その内容に感服していたコフィンは、ニューヨーク市場の株暴落後の経済不況の中にある小さな神学校がテイリツヒを単独で受け入れることはとてもできないと考えたが、もし彼が英語で講義をすることができて、さらにコーンピア大学が哲学部の客員教授としてテイリツヒを雇うのであれば、その経費の半分と宿舍とをユニオン神学校が提供してもよいと提案したのである。<sup>19</sup>

この提案はこの委員会の暫定的な委員長であったジョン・デュー

イによって受け入れられ、当初は三人のはずであったリストにティリッヒの名が加えられ、他の三人とは違ってコロンビア大学とユニオン神学校の協力という条件のもとにニューヨークに招かれる四人の教授のひとり選ばれたのである。<sup>20</sup> もちろんティリッヒはそのようなことがあの焚書の夜の後で決定されていることを知る由もなかった。

この決定についてコフィンがデューイから受け取った報告書の中には次のように書かれている。「コロンビア大学に避難民学者のため一時的に基金を設立することに対し、教授会の構成員に意見の開陳を求め、教授たちがこの目的のために基金を捻出する用意があるかどうかを問い合わせたところ、直ちに反応があり、一二五名の教授会の構成員より寄附の申し出を受けた。それによって次の四人の追放された学者に対して、コロンビア大学としては財政上の責任を負うことなしに、客員教授としての教授職を設置することが可能になった。それは人類学者ユリウス・リップ、考古学者マルガレート・ビーバー、数学者シュテファン・ヴァルシャウスキー、そして神学者パウル・ティリッヒである。」<sup>21</sup>

この決定を受けてフランクフルトにいるティリッヒに招聘のための暗号めいた手紙を書いたのはラインホルド・ニーバーで、さらに三日後にコロンビア大学事務局長フランク・D・ファッケンソールの正式な招聘状が届いたのであった。ティリッヒはコロンビア

らの招聘があったということは公にせず、文部大臣にこの招聘に基づいて一年間コロンビア大学に滞在することの許可だけを求めた。文部大臣は九月九日に出国の許可を出した。もちろん招聘状には具体的な内容については曖昧な表現で、ほとんど何も書かれておらず、一年間の客員教授として招聘したいと書かれていただけであった。それでもティリッヒはニーバーの手紙を受け取った日から出国まで秘密警察の尾行を絶えず受けることになったと後に回顧している。<sup>22</sup> 彼は一〇月の終わりに船でニューヨークに向かった。『社会主義的決断』は著者であるティリッヒをドイツからニューヨークへと連れ去ったのである。

### 3. 一九六〇年六月一日付けの東京からの手紙

一九三三年一月三日の午後濃霧のニューヨーク港にティリッヒ夫妻を乗せた船が入港した。ティリッヒはその一ヶ月後に停職となっていたフランクフルト大学哲学部での教授職を正式に解雇され、それから一九六五年にシカゴで亡くなるまで三二年にわたりアメリカに留まることになった。最初はコロンビア大学とユニオン神学校で教え、定年後も一九五五年から六二年まではハーヴァード大学全学教授として、さらには一九六二年から死の直前まではシカゴ大学のニュービーン記念神学教授職の責任を負っていた。

自らの著書『社会主義的決断』によって亡命を余儀なくされた

テイリツヒであったが、亡命のすぐ後で、極東に住む『社会主義的決断』の数少ない読者と出会うことになった。何らかの手段によってこの書物を日本で購入していた有賀は一九三五年にニューヨークのユニオン神学校に二度目の留学に出かけ、そこでテイリツヒと出会ったのである。フランクフルト、ニューヨーク、そして京都で起こった出来事がこの書物によって不思議な仕方では結び付けられることになったのである。

ところでそのテイリツヒは、自らの書物を焚書にされ、アメリカへの亡命を余儀なくされてから二七年後、ドイツとアメリカ、アメリカと日本の戦争の時代を経て、彼は東京にいた。彼の遺稿資料集の中に東京滞在に関連する手紙が百通以上残っていることが今回の調査で明らかになった。<sup>(23)</sup>その未公開の手紙の中に次のような内容の手紙が残されていた。「一九六〇年六月一日、東京。(……)あなたが一九三三年の出来事を思い起こさせる一冊の書物を私の目の前に出された時には、驚きのあまりに言葉もありませんでした。(……) 私たちの間にあれから三〇年もの時間が流れたのです。(……) 心からの挨拶を。 パウルス<sup>(24)</sup>」

「パウルス」とは、もちろんパウル・テイリツヒのことで、ここであなたと呼びかけられているのは、実は有賀である。手紙の発信地が東京なのは、この時テイリツヒは東京大学の高木八尺教授を委員長とする国際文化会館の日米知的交流委員会の招きを受けて、五

月三日から七月一日まで六本木に滞在していたからである。<sup>(25)</sup>彼は全国各地の大学で講演し、京極純一と『中央公論』誌で南原繁とは『世界』誌で対談し、また長清子、堀田善衛、加藤周一、木下順二、丸山眞男、鶴見俊輔、鶴飼信成などと日本の精神的状況についての対話を重ねた。もちろん専門の神学や哲学についての講義を行い、日本の神道、仏教の代表者たち、とりわけ鈴木大拙や安田理深、信国淳、久松真一、大谷光紹や西谷啓治とは何度も研究会や討論会を行っている。来日中の予定の中でもっとも重要な課題は五月二三日から六月一三日まで京都大学で行われた集中講義であった。テイリツヒはその講義を終え、再び東京に戻ったところで京都で世話になった有賀に礼状を書いたのである。引用したのはその礼状の一部である。この手紙の中に書かれている「一九三三年の出来事を思い起こさせる一冊の書物」こそが、有賀の蔵書にあったテイリツヒの『社会主義的決断』の焚書事件と考えて間違いないであろう。この手紙が見つかったことで、本書に記されていた第三の情報、すなわち一九六〇年六月一日の日付をもったテイリツヒの手書きのサインの意味は明らかになった。

テイリツヒは一九六〇年、戦後になって二七年前の悪夢の夜に、ナチスによって焼かれた自らの著書の初版と京都で再会したのである。戦後のリプリント版ではない初版は、ハーヴァード大学に保存されているテイリツヒの遺品のリストの中にも見出されないもので



あるから、彼自身まさに二七年ぶりにフランクフルトでも、ニューヨークでもなく、日本の京都で自らの運命を大きく変えることになった書物を再び手にとることになったのである。その時の感激を有賀所蔵の自著に「パウル・ティリッヒ。友情と感謝をこめて。(二七年の時を経て)」と青いインクで書き込んでいるのである。

さて、もう一度戦前のニューヨークの状況に話し戻すことにしよう。ティリッヒと有賀は一九六〇年に京都で再会する前に、一九三五年にニューヨークではじめて出会った。有賀鐵太郎は一八九九年に大阪で生まれ、東京都府立第一中学を卒業後、同志社大学神学部入学している。一九二二年に卒業後、シカゴ大学、コロンビア大学、ユニオン神学校へ留学し、帰国後一九二六年から同志社大学で神学を講じた。一九三五年にユニオン神学校に再留学し学位を受けている。戦後一九四七年には新制の同志社大学神学部の初代神学部長となり、一九四八年には、京都大学文学部教授（哲学科宗教学第二講座担当）となった。専門は古代の教父学を中心とするキリスト教思想史であった。<sup>(26)</sup>

『社会主義的決断』が出版された一九三三年には日本にいたが、この書物を彼が日本で一九三三年に購入したのではなく、一九三五年にアメリカでティリッヒから直接譲り受けたという可能性も完全には否定できない。すなわち第一の情報である、本書が『社会主義的決断』の初版であるということ、そして禁書リストに入っていた

この書物を有賀がなぜ持っていたのかという問いへの答えの可能性としては、一九三五年に有賀がニューヨークでティリッヒと出会った際に彼から譲り受けたという仮説が可能である。

ティリッヒは既に述べた通り一九三三年に、コロンビア大学とユニオン神学校の招きを得て、アメリカに亡命している。その二年後の一九三五年に有賀はユニオン神学校に再留学しているのである。その時ティリッヒはコロンビア大学での非常勤教授の仕事はなくなり、不安定ではあったがユニオン神学校の宗教学の客員教授という地位を得ていた。ちなみにティリッヒがユニオン神学校で正式に准教授となるのは一九三七年のことである。しかしティリッヒは一九三四年の就任の年から他の教授と同じように、講義と演習を担当していた。有賀がユニオンで学位を得た時の論文の公聴会の出席者名簿にはティリッヒの名前も記されているから、<sup>(27)</sup>両者がこの学校で知り合いになっていたことは確かである。日本とアメリカとが戦争状態になる五年ほど前のことである。後に日本の同盟国となるナチス・ドイツによってティリッヒが停職になり、彼がニューヨークに亡命することがなければ、両者はニューヨークで出会うことはなかったはずである。

しかしニューヨークで有賀がティリッヒからこの書物を受け取ったという仮説は支持しにくい。この仮説の弱さは、見開き頁に記されていた第二の情報「T. Ariga October 1933」という書き込み

と矛盾してしまうことである。この情報は本書を有賀が入手したのは一九三三年の一〇月であったことを示している。もちろん有賀が何らかの理由で後になってこの日付を記入したとも考えられるが、そのようなことをする積極的な理由は見当たらない。

この仮説は、次のような第三者の証言によつて最終的に否定されることになった。それはテイリツヒについての最初の概説書を日本語で書いた土居真俊が次のように証言しているからである。「筆者が初めてテイリツヒ教授の著書に接したのは、確か昭和九年（一九三四年）のことであつたと記憶する。当時、筆者は同志社大学神学部の学生であつて、有賀鐵太郎教授（現京都大学文学部長）より、Die sozialistische Entscheidung『社会主義的決断』の講読を受け、その明快な叙述と革命的情熱とに魅せられたものである。」つまり、土居の記憶に間違いがないとすれば、有賀は、留学より前、しかもこの書物が出版された翌年一九三四年の春には既に同志社大学でこの本の講読を学生と一緒に行っていたことになる。とすると有賀はこの書物を、ニューヨークへの留学よりも前に、しかもこの書物が刊行されてから一年の間に、しかも発禁処分になるまでのわずかの時間に何らかの方法で入手していたということになる。そして有賀は、一九三五年にユニオンに留学した際に、後から述べるような理由で、そこで先に教授職を得ていたテイリツヒの書物を日本から持参し、彼に見せていたのである。

さて、そうであるならば残された問題は、一体どのような経路を辿つてこの書物は一九三三年に有賀の手に届けられたのか、ということであろう。

#### 4. 一九三三年三月二七日の京都とポツダム

そこでまず入口を調べてみることにした。すなわちこの書物がどのようにして日本に届けられ、有賀の蔵書に加えられたのか。日本に輸入、あるいは持ち込まれた経過について日本側の資料を調査してみることにした。

ひとつの可能性はこの時代ドイツに留学していた同志社の同僚、あるいは有賀の友人が直接ドイツで購入し、有賀の手元に郵送したという可能性であるが、京都大学文書館所蔵の有賀鐵太郎関係文書の中にある彼の日記によれば、一九三三年から三四年にこの書物の購入を在独の友人や知人に依頼、あるいはそれを郵送してもらい、受領したという記述は見出せなかった。

また一九三三年当時同志社大学文学部神学科に出入りしていた洋書を取り扱う業者は、同志社大学の情報センターの記録を探索したところ、主に叢文堂、丸善の二社であることがわかった。しかし一九三〇年代の同志社大学の教員が購入し、納品された書物のリストは残されてはいなかった。また京都大学文書館の有賀鐵太郎関係文書の中に残されている有賀の日記にもこの書物の購入についての記

載は見当たらなかった。入口調査の可能性はすぐに断たれてしまった。

入口から調べることは調査可能な資料が不足していることからして可能性が低いと思われるので、次にドイツでの出口を調べてみることにした。すなわちポツダムのアルフレッド・プロッテ出版社に本書が日本に送られたことを示す何らかの記録が残っていないか、と考えたのである。

ポツダムのアルフレッド・プロッテ出版社は、現在は存在していない。アルフレッド・プロッテは二〇世紀の初頭のポツダムではよく知られた編集者で、社会主義やこの時代の芸術哲学に関する書物の編集と出版を引き受けていたし、ティリッヒたちの雑誌『新社会主義雑誌』の出版を全面的に引き受けていた。

実際の印刷を引き受けたのは同じポツダムの個人業者エドワルト・シュティヒノテであるが、この人物についての記録も今日では見出すことはできない。ポツダムの戦前の地図から、この出版社が一九三三年頃に使用していた社屋があったライプツィヒ通り二一番地、現在のゴルドシュタイン通り二三番地が確認できたが、今日その場所は普通の住宅街で、出版社の跡は見当たらなかった。かつてのポツダムの文書資料館で、現在のブランデンブルク文書資料館にもティリッヒのこの書物に関する情報は残されていない<sup>20</sup>。この出版社の名前から遡って、この出版社がこの時代エドゥアルト・

ハルトマンやアーノルド・ヴォルフアーズ、ヘルマン・ヘラーやハンス・ジーモンスの書物を出していることが判明した。

資料館でアルフレッド・プロッテ出版社を含む資料が入ったボックスにはティリッヒの『社会主義的決断』に関する資料や出版・出荷状況を裏付ける資料は何も残っていない<sup>21</sup>。しかしアルフレッド・プロッテ出版社が刊行していた『新社会主義雑誌』の販売に関する資料が残っており、そこにティリッヒの『社会主義的決断』に関する情報が残されていた。実はティリッヒの『社会主義的決断』は、『新社会主義雑誌』の別巻シリーズ、「社会主義的行動」の第二巻として出版されているのである<sup>22</sup>。この販売資料には、『新社会主義雑誌』の出荷数が出荷先都市名を含めて表になっており、そのリストの中に、「社会主義的決断」というタイトルはなかったが、「社会主義的行動」第二巻という名前があった。しかも毎号の雑誌の場合と同じように、ドイツの各州、都市、そして外国への発送冊数が同じように記録されており、「外国」という覧には「アジア」とあり、ただひとつ「日本」と記されており、二冊と書かれていた。そこには「船便」を意味する印が押されていた。

ということは、この書物はドイツ国内の場合とは違って、ドイツの書店に並ぶよりも先に、海外用として船便で日本に送られていたのである。つまりドイツ国内では本書が刊行され、一八日後に出荷停止となったが、外国便は通常通り、書店に並ぶよりも前に発送済

みとなり、出荷停止の処分を偶然免れることになったのである。それが偶然であったという根拠は、同じように毎号二冊ずつ日本に送られていた『新社会主義雑誌』の次号は、海外には送られなくなっていることが、この販売資料から読み取れる。つまりテイリツヒの『社会主義的決断』が別巻ではあったが、海外に発送された最後の『新社会主義雑誌』だったのである。有賀が一九三三年一〇月に日本で購入したのは、この二冊のうちの一冊である。

もつともその場合でも、有賀が広告などの情報で、この書物を直接、あるいは書店を通して注文したのか、それとも書店に並んでいたものを購入したのか、ということまでは判断できない。しかしドイツ側の資料によれば、日本には『新社会主義雑誌』は毎号二冊ずつ送られていることになっているので、有賀が特別に注文したということではないであろう。また有賀が日本における『新社会主義雑誌』の定期購読者であったかどうかということであるが、有賀の蔵書にこの雑誌は見出されないし、また有賀の一九四五年までの著作、論文、日記に『新社会主義雑誌』についての言及は見られないことから、定期購読者であったということはできないであろう。

もちろんそうになると、有賀が購入した以外の一冊は誰が購入したのか、ということも興味あることであるが、それは本調査の対象外の問題であるので、これ以上調べてはいない。もうひとつ残された可能性は、一九三三年の春にこの書物を有賀より前に購入した人が

いて、その人物から有賀が譲り受けた可能性、またその人物が古書店に売却し、それを有賀が購入した、という可能性も考えられるが、もしそうであつても、一九三三年一〇月に有賀がこの書物を手していたことの歴史の意味は変わらない。

#### 結びにかえて——書物のまだ開かれていない頁

この書物は、一九三三年三月二七日にポツダムで出版され、船便で日本に送られ、その一冊を有賀が購入した。有賀はテイリツヒとの思想的な出会いを経験したのである。もちろん有賀はこの書物がナチスの焚書を潜り抜けて日本に届けられたことを知らなかったであろう。その後テイリツヒはこの書物の出版が原因のひとつとなってアメリカに亡命し、ニューヨークに向かった。有賀もその二年後ニューヨークに二度目の留学に出かけ、そこで学位を取得しただけではなく、『社会主義的決断』の著者と読者とが直接出会ったのである。その後テイリツヒはアメリカに留まり、有賀は戦争へと向かう日本に戻ってきた。テイリツヒはナチスによって最初に教授職を剥奪された非ユダヤ人教授として戦後世界的名声を得るようになった。一九五二年に神学と心理学とを巧みに結びつけた『存在への勇気』<sup>(28)</sup>は、折からのアメリカでの心理学と自己分析ブームの中で大成功を収め、一九五九年には彼の肖像が『タイム』誌の表紙を飾った<sup>(29)</sup>。他方で有賀は戦争の困難の中でも存続した同志社大学の神学科

に在籍し、戦後は他の研究者が占領軍によってパージとなる中で、京都大学文学部の宗教学第二講座の教授に迎えられた。そして両者は戦後ニューヨークやフランクフルトではなく、京都で一九六〇年に再会することになった。一九三三年から一九六〇年までの両者の知的、そして人格的交流の要に、あの『社会主義的決断』があったと言っても過言ではないであろう。というのは、京都大学文書館の有賀鐵太郎関係文書ではなく、六本木の国際文化会館に保存されていた手紙の中に次のような記述があることも今回の調査で発見したからである。それはティリッヒを日本に招聘するにあたって、有賀と高木八尺が京都とニューヨーク、あるいは東京とニューヨークの間で何度も準備のための手紙を交換している際に書かれたものであった。

「あなたと一九三五年にはじめてお会いして以来、既に二五年の歳月が過ぎ去ったのです。ユニオンの中庭で二人の異邦人が確かに出会ったのだという証拠を京都で見せたいと考えています。」<sup>31</sup>

「ユニオンの中庭」とはニューヨーク市のユニオン神学校の有名なクワトラングルという中庭のことで、そこで一九三五年、アメリカに亡命して数年を経たティリッヒと京都からやはりこの学校で学位を得るために再び留学していた有賀が偶然にも出会ったのである。その場所がこの学校の中庭であった。そこでどのような会話かなされたのかは今となっては分らない。しかし両者は京都で再会す

るまでその記憶を大切に共有していた。その中庭で「二人の異邦人が確かに出会ったのだという証拠を京都で見せたい」と有賀は書く。それはあの中庭での出会い、そしてそこで両者のそれ以後の変わらぬ友情がはじまったきっかけが一九三三年に有賀が京都で購入し、一九三五年にユニオンに出かける際におそらく持参したティリッヒの『社会主義的決断』だったのである。そう考えると一九六〇年の手紙の意味も、そしてティリッヒと有賀によるこの書物の扉への書き込みの意味もすべて理解できる。

一冊の書物が歴史を物語っている。それはこの書物に書かれている内容とは無関係であるようだが、実は内容とも深くかかわっている、二人の神学者の思想と生涯との知的交流の痕跡と軌跡とを雄弁に語っている。そしてそれはこの時代の研究において、ヨーロッパ思想史とか、アメリカ社会史、あるいは日本思想史という地理的に条件付けられた断片的な視点からの研究ではなく、「同時代史」とでも呼ぶべき複合的な視点からの研究が必要であることを示唆しているように思える。

また私たちは一般には書物を通して、そこに書かれている内容を読み解き、著者の考えを受け取るのである。そして出版された何千冊もの書物の中の特定の一冊を取り上げて、誰がその書物を購入し、誰が読み、誰の書棚に収められていたのかについては考えないし、また古書店や図書館に並ぶ書物を見てもそれを購入し、読んだ者の

情報をそこから読み取ることができない。しかし有賀の蔵書の中にあったティリッヒの『社会主義的決断』には、書かれたテキストを超えて、語り尽くされていない、そして開かれていない頁があったのである。それを開くためには、思想史研究にも、歴史研究にも属さないが、しかし両者を結びつけるような視点と方法が要求されていたのである。

## 注

- (一) Vgl. Thomas Lischeid: Symbolische Politik. Das Ereignis der NS-Bücherverbrennung 1933 im Kontext seiner Diskursgeschichte. Heidelberg 2001
- (二) Vgl. Ulrich Walberer, 10. März 1933. Bücherverbrennung in Deutschland und die Folgen. Frankfurt am Main 1983
- (三) 焚書された書物と作家のリストについては Hans Sarkowicz, Alf Mentzer: Literatur in Nazi-Deutschland. Ein biographisches Lexikon. Hamburg/Wien 2002 を参照しよう。
- (四) Paul Tillich, Die sozialistische Entscheidung (= Die Sozialistische Aktion. Heft 2, Schriftenreihe der Neuen Blätter für den Sozialismus), Alfred Protte Verlag Potsdam 1933
- (五) Vgl. Werner Schüssler und Erdmann Sturm, Paul Tillich Leben-Werk-Wirkung, Darmstadt 2007, 37

- (6) 近年の欧米のティリッヒ研究の成果については A・クリストファーセン他編『アーレントとティリッヒ』法政大学出版会 二〇〇九年に付した拙論を参照のこと。
- (7) Wilhelm and Marion Pauck, Paul Tillich, His Life and Thought. Vol. I: Life. New York 1976 (田丸徳善訳『パウル・ティリッヒ 生涯』ヨルダン社 一九七九年) 一六〇頁
- (8) Paul Tillich, Ergänzungs- und Nachlaßbände zu den Gesammelten Werke, Bd. III, Stuttgart 1973, 41
- (9) ちなみにベルリンで行われたこの焚書はラジオで全国に向けた中継放送され、そこでナチスの宣伝大臣ゲッベルスが行った講演が生放送された。
- (10) このあたりの記憶を彼らが語ったものについては Erinnerungen an Paul Tillich. In Gesprächen mit Prof. Dr. Max Horkheimer. Prof. Dr. Theodor W. Adorno, Prof. Dr. Eduard Heilmann, Prof. Dr. Ernst Bloch und Prof. Dr. Wolf-Dieter Marsch. Redaktion: Gerhard Rein. In: Eine Sendung des Süddeutschen Rundfunks Stuttgart am 21. August 1966 を参照しよう。
- (11) フランクフルト大学の歴史と社会研究所の成立については Wolfgang Schivelbusch, Intellektuelleddämmerrung. Zur Lage der Frankfurt Intelligenz in den zwanziger Jahren, Frankfurt a. M. 1982 が今も重要な魅力的な重要な文献であろう。
- (12) このあたりの大学行政上の複雑な政治的動きについては Werner Schüssler und Erdmann Sturm, Paul Tillich Leben-Werk-Wirkung, Darmstadt, 2007 を参照しよう。

- (21) Neue Blätter für den Sozialismus. Herausgegeben von Eduard Heimann, August Rathmann, Paul Tillich, Alfred Protte. Verlag Potsdam. ちなみにこの雑誌は季刊で、一冊九〇シニンド、年間定期購読料は二マルク三四シニンドであった。
- (14) 「追放の対象となったのは正教授三三二人、定員外教授三〇〇人、私講師三三二人の合計一六八四人であった。その五六パーセントが民族的、政治的理由からの停職であった。」(Hans Meier: Nationalsozialismus-Hochschule-Politik. in: Helmut Kuhn(hg.), Die Deutsche Universität im Dritten Reich, München 1966, 82)
- (15) Vgl. Hannah Tillich, From Time to Time, New York, 1973, 115
- (16) Frankfurter Zeitung, 3. April 1933, 12
- (17) Hans Meier, Nationalsozialismus-Hochschule-Politik, in: Helmut Kuhn(hg.), Die Deutsche Universität im Dritten Reich, München 1966, 82
- (18) Henry Sloane Coffin, A Half Century of Union Theological Seminary, 1896-1945, New York, 1954, 134f.
- (19) Ibid, 133
- (20) Charles Weiner, A New Site for the Seminary: The Refugees and American Physics in the Thirties, in: Donald Fleming and Bernard Bailyn, eds., The Intellectual Migration: Europe and America, 1930-1960, Harvard University Press, 1969
- (21) Ibid.
- (22) Paul Tillich, My Search for Absolutes, New York 1967, 42f.
- (23) この手紙は深井が既に調査を終えて、シモンボン大学のFriedrich Wilhelm Graf教授、ワットソン国防衛大学のAlf Christophersen教授と共にワグネルンのWalter de Gruyterより出版を依頼されたことである。
- (24) Paul Tillich Archives: Works: An Inventory in Andover-Harvard Theological Library Harvard University, Paul Tillich Papers, Box 203A 203: 008
- (25) この時の講演の記録は高木八尺編『パウル・ティリッヒ講演集 文化と宗教』岩波書店 一九六三年に収録されている。
- (26) この時代の有賀については深井智朗・佐藤貴史「近代日本におけるユダヤ人問題の一面面」『思想』一月号 二〇一一年 一〇四一号 岩波書店 一六―三二頁を参照の事。
- (27) その際のティリッヒの短いコメントを含む記録のコピーがPaul Tillich Archives: Works: An Inventory in Andover-Harvard Theological Library Harvard University, Paul Tillich Papers, Box 203A 203: 008 248頁。
- (28) 土居真俊『ティリッヒ』日本基督教団出版部 一九六〇年 一三二―九頁
- (29) Brandenburgische Landeshauptarchiv, Zimm Windmühlenberg 14469 Potsdam-Bornim
- (30) Depositum Alfred Protte Verlags Ana 52b
- (31) ちなみにこのシリーズの第一巻はEduard Heimann, Die Sozialistische Wirtschafts- und Arbeitsordnungであった。
- (32) Paul Tillich, The Courage To Be, New Haven 1952
- (33) Time, 14 March 1959

(28) Paul Tillich Archives: Works: An Inventory in Andover-Harvard  
Theological Library Harvard University, Paul Tillich Papers, Box 203A  
203. 008